国語

(45分)

1

次の文章を読んで、①～⑧に答えなさい。

ウシの促成という経済効率の追求が生んだ脳症感染の問題は、私たちの食べものをどのようにして、どこでつくるかということを考えさせます。農業は、単なる効率だけで判断できないものと考え、あらためて農業のことを考える必要がある。

㋐循環産業としての農業の確立は、二十一世紀の日本の大きなテーマです。農業とは農林水産業であり、近年ヨーロッパを中心に指摘されているこれらの産業のもつ多面的機能に着目していかなければなりません。多面的機能とは、食べものの自給で社会の安定や安心を保つこと、水の保全を基本にしたよい環境の維持、緑豊かなゆとりのある暮らしのなかでの文化の継承や子どもたちの心の教育などであり、㋑安心とゆとりの生活がここから得られると考えてよいでしょう。

じつはこのところ、いくつかの自治体で循環型を目指した地域での実験がはじまっています。家庭ゴミや家畜のし尿といった有機物をバクテリア処理して肥料化するなどの方法で、廃棄物の有効利用によって環境問題の解決と農業の有機化を目指すプロジェクトです。このようなココロみが広がっていくことが期待されます。

[㋓]、生命誌研究館のある高槻市では、森林組合が間伐材や近郊から集まる樹木をチップ化して、いわゆる「バイオマス」(生物資源)により、市民の憩いの温泉やバーベキューの場をつくりにぎわっています。バイオマスエネルギーを活用したキノコの栽培もしています。

これらは最近の私の小さな体験ですが、着実にこのような動きはあります。㋒新しいことはこのようにして小さな芽がいくつか出そろったときに、急速にそちらへ動いていくという方法で起きることが多いと思っていますので、二十一世紀の農業に期待しています。

農業は、人間にもよい効果があるのはよく知られています。玉村豊男さんの『草刈る人』に、農場にやってきて草刈りや収穫の手伝いをした人は必ず、「達成感がある」というとありました。私もそれほど大げさではありませんが、庭の草取りをしたときに、いつも心地よい疲労感と達成感を味わいます。日常の研究という仕事はもちろん大好きですが、いつもどこかで、もう少しもう少しという気持ちがあり、「あー終わった」と思うことはほとんどありません。

体を使い、この区画の草を取るという作業は、ふしぎな達成感を与えてくれます。これは私だけの気持ちかと思っていたのですが、玉村さんの農場で多くの人が同じ言葉を語ったということは、かなり一般的な気持ちなのだと思います。自然に向かっているときに得られるものでしょう。

玉村さんの本にもう一つ、私がいつも考えているのと同じことが書いてあり、[㋕]という気持ちになりました。コンピュータを用い、インターネットで得られる情報は、世界中から集まるかもしれないけれど、それはすでに誰かが切り取った断片であり、それを集めただけのことです。しかも、情報はいつも断片的に見え、全体を見ることはなかなかできません。それに対し、農場は一目で見渡せる。日本という国の一地域の一隅にある小さな畑かもしれないけれど、誰が見せてくれたのでもなく、自分の目ですべてを見渡し、全体の関係を知ることができます。目だけでなく、体の全感覚を用いて知るわけです。断片的な情報の集まりから得るものより、こうして得られるもののほうが、人間としての自分にとっての意味は大きい。

まさにそうです。このように、人間のすべてでぶつかっていけるのが自然であり、そこでおこなわれる農林水産業は、人間の能力を高める作業になるわけです。もっとも㋔フクザツなむずかしい産業だからこそ、挑戦のしがいがありますし、ITやバイオテクノロジーなどの技術も上手に使っていけば、やりがいのある産業になるでしょう。

㋕このような多くの面を持つ農業を、単なる効率論で切り捨てるのはまずいと思います。しかも、こうして自分の身近で生産されたものは、素性がはっきりします。遠くから運んでくるものほど、保存料も添加物も必要になりますし、㋖それは食べものというより商品になってしまいます。生活に必要なものは、なるべく身近で手に入れられるような社会にしたいものです。そのほうが、安全性も高まるでしょう。

(出典　中村桂子『『生きもの』感覚で生きる』)

① ――の部分㋐、㋔を漢字に直して楷書で書きなさい。

② ――㋑の中の動詞をすべてそのままの形で抜き出して書きなさい。

③ 「㋐循環産業としての農業」とはどういうものか。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

(1) 生活や文化、環境の豊かさなどさまざまなことを考慮しながら、廃棄物などを有効利用して生産につなげていこうとするもの。

(2) 機械化して生産性をあげる農業を脱して、林業や水産業との均衡を保つ昔のような環境条件に戻していこうとするもの。

(3) さまざまな産業に見られる効率的な箇所を多面的に取り入れることによって、経営上の合理化と安定化を図ろうとするもの。

(4) 自治体と森林組合とが共同することによって人々の憩いの場を広げ、市民に親しまれる農林業を目指そうとするもの。

④ [㋓]に入れるのに最も適当なことばは、(1)～(4)のうちのどれですか。

(1) つまり　(2) なぜなら　(3) また　(4) しかし

⑤ 「㋒新しいことは……期待しています」とあるが、「二十一世紀の農業」のどういう考え方を「新しい」というのか。これまでの考え方との違いがわかるように三十字以内で書きなさい。

⑥ [㋕]に入れるのに最も適当な慣用的表現は、(1)～(4)のうちのどれですか。

(1) 意表をつく　(2) わが意を得たり

(3) 至れり尽くせり　(4) わが目を疑う

⑦ 「㋖このような多くの面を持つ農業」とあるが、農業に携わる場合の人間にとってのよい面を六十字以内で説明しなさい。

⑧ 「㋗それは食べものというより商品になってしまいます」とあるが、この場合、筆者は「商品」をどのようなものと考えているか。それを説明した次の文の[ⓐ]～[ⓒ]に入る適当なことばを、文章中からⓐは漢字三字で、ⓑ・ⓒは漢字二字でそれぞれ抜き出して書きなさい。

「商品」とは、[ⓐ]よりも[ⓑ]を重視して作られた[ⓒ]のわからない生産物。

2

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

古典では冬は重要な季節です。鎌倉時代、室町時代の中世の美学の中では、冬が重大な概念になっています。たとえば、心敬という十五世紀の連歌師が『ひとりごと』という書物の中でいいことをいっています。

氷ばかり艶なるはなし。刈り田の原などの朝、薄氷。枯れ野の草木など、露霜にとぢたる風情、おもしろくも艶にもはべらずや。

氷などは冷たいばかりでどうということはないと思いきや、それが艶だというのですから、㋐およそ反対の概念です。艶とは、牡丹の花の㋑極彩色とか、脂ぎっている状態でしょう。そうではなくて、枯れはてた冷たいものが艶だという。樹氷や霧氷は「草木などの露霜にとぢたる」ものではないでしょうか。心敬は、それを恰好がおもしろいと見るのではなく、㋒凝視していますから、閉じこめられ圧縮された生命力を感じるのです。それが「とぢたる風情」です。霧氷とか樹氷とか、凍りついたもの、凍てついたものの美しさを心敬はいっていると思います。結局すべてを捨ててしまう。否定の美学といってもいい。何かもう一つ裏返してみる思考方法。これが中世の思考の一つの特徴です。

『枕草子』では「春はあけぼの。秋は夕暮れ。」といいましたが、後鳥羽院という中世の歌人は、

見わたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけん

と歌いました。「夕べは秋がいいというが、[㋓]の夕べだっていいではないか」というわけです。これも、㋔王朝的な美意識をいっぺん否定し、そこに浮かびあがってくるものを季節の美しさとしてとらえようとする。否定の精神が美になりますと、氷がいいということにもなる。美しいものをつかみ出すわけですから、否定することはすなわち

肯定です。何かを否定して、そこに積極的な意味を見つけていこうとするというのが心敬の考えているもので、冬の美しさはそういうところにあるのではないでしょうか。（出典　中西進「日本人のこころ」）

① ――の部分㋑の「極」と同じ読みで、「極」を使った熟語が作れる漢字は、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) 致　(2) 究　(3) 意　(4) 限

② ――の部分㋒、㋓の漢字の読みを書きなさい。

③ 「およそ反対の概念です」とあるが、それは『ひとりごと』の中のどの表現について述べたものか。十字以内で抜き出して書きなさい。

④ ㋔ に入れるのに最も適当な語を漢字で書きなさい。

⑤ 「王朝的な美意識をいっぺん否定し」とあるが、後鳥羽院の和歌の中から「王朝的な美意識」にあたる部分を現代語訳して書きなさい。

⑥ 「鎌倉時代……なっています」とあるが、それはなぜか。それを説明した次の文の［　　］に入る適当なことばを二十五字以内で書きなさい。
氷に代表される冬の美しさは、中世の美学における［　　］という考え方によってとらえられたものだから。

3

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

（「私」は明朝上京する。支度をする「私」の横にすわって「母」は「案ずるより産むが易し」という意味の言葉をかけた後、次のように言った。）

「明日は早いからお風呂に入って、もう、おやすみ。」
母にせかされて、いつもより二時間も早い九時すぎ、床をのべていると、父が帰ってきた。
「知子、ちょっと来てごらん。」母の声だ。早くやすめと言っておきながら、と思って茶の間に入ると、母は立ったままの私に、
「お父さんがね、明日、知子と函館まで行くことになったのよ。」と明るい声で言う。
「茅沼炭鉱に出張だよ。」
少しお酒のにおいはするが、酔ってはいない父が言った。
「いつ決まったの、お父さん。」
私は、うれしいとも安心したとも言わずに、まるで詰問するような口調で、父にたずねた。
「うん、今日だ。じゃあ、明日は早いから、もう寝なさい。」
私は「おやすみなさい。」と言って自分の部屋にもどった。
そうか函館まで、お父さんと一緒か、と思っただけだった。父のツトめていた会社が、道南の、この茅沼炭鉱を買い取るというので、この一年、父は何度も出張していた。
二月末の東室蘭駅は寒風が吹き抜けていた。急行「すずらん」がホームに入ってくると、やはり受験生らしい数人が私たちと同じ車輌に乗った。室蘭市内のもう一つの高校の生徒だろう。
父と私は向きあって窓側にすわった。これから函館までの六時間、ずっと海を見て行くのだ。父は立ちあがると私のスーツケースを網棚にのせてくれた。
東室蘭を出ると、すぐに内浦湾の海が見えてきた。窓からの風景は、二月の北海道ならどこも同じだと感じるほど殺風景で、少し寂しいものだった。
ぼんやり海を見ながら、私は、この二十四時間の汽車と船の旅の道のりを頭の中で、たどっていた。
父は東室蘭駅の売店で買った新聞を見ている。私はなんだかホッとして、このまま函館に着くまで、ずっと新聞を見つづけていてほしいと思った。
急行「すずらん」は、やっと長万部に着いた。父は窓を開けて、「いか飯」とお茶を買った。私たちの横の座席は空いたままだったので、買ったばかりの温かい駅弁を、ゆっくり食べた。食べながら私は、あと三時間、あと三時間と、心の中で言っていた。
窓の外は単調な雪の白と、波の荒い海だけだ。
「駒ヶ岳が見えてきたよ。」
私より先に父が言った。ああ、父もやっぱり、心の中で、あと三時間、あと三時間と言っていたのだ。そう思うと急に私は、父が気の毒になってきた。こんな可愛気のない娘が、自分の子だとは。
車窓から見える駒ヶ岳は、ゆったりとサンヨウをかえながら、父と私を、くつろがせてくれた。それは、糊のきいたブラウスの衿ぐりが、やっと肌になじんで、着心地がよくなったときのような気分に似ていた。
「まもなく終着、函館です。」と車内放送が流れた。
父は立って、私のスーツケースを網棚からおろしてくれた。それを自分の横に置くと、父はコートの内ポケットから茶色の封筒を取り出して言った。
「この中に東京二十三区分地図と、お父さんが書いておいた上野から荻窪までの道順と電車の乗り方のメモが入っているから、連絡船に乗って、ゆっくり見なさい。」
六十六歳で死んだ父と、同じ六十代になった今、私は、十八歳の扱いにくい娘だった自分を、父と一緒に苦笑しながら話すことができるような気がする。
私が受験で上京した昭和三十四年の二月、父は「出張だよ。」と言って函館まで送ってくれた。しかし、家を出る時、父は出張用のカバンを持っていなかった。私はそれに気づくと、なぜか函館までの六時間が重荷になってきた。六時間が長かった。
机の抽斗を整理するたびに、一番下に、あの父が書いてくれた荻窪までの道順メモと、東京二十三区分地図を確認して、抽斗をとじる。
（出典　青木知子「六時間」）

① ――の部分㋐、㋔を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「明るい声で言う」とあるが、このときの母の気持ちの説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) 上京への不安に加えていろいろなことを言われてすねている娘をもてあまし、機嫌をとろうとしている。
(2) 父を嫌っている娘の反発を予想し、父の付き添いを何とか承知させようと気を遣っている。
(3) 早く寝るようにと言った直後に呼んだので、娘にそのばつの悪さを悟られまいとしている。
(4) 娘が一人で上京するのが気がかりだったが、父が途中まで一緒に行くことになったので安心している。

③ 父の同行について、知子の気持ちが「そうか……と思っただけだった」から「私は……と思った」という居心地の悪さに変化したのは、知子がある事実に気づいたことによる。その事実は何か。「こと」につながるように文章中のことばを用いて二十字以内で答えなさい。

④ 「あと三時間……言っていた」とあるが、この時の知子の思いを「あと三時間」に続ける形で、よくわかるように二十五字程度の一文で答えなさい。

⑤ 「駒ヶ岳が見えてきたよ」という父の言葉は、この文章の展開においてどのようなはたらきをしているか。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。
(1) 知子に父への親近感を抱かせることで、変化に乏しい風景を眺めながら感じていた重苦しさを、ふと解きほぐし、父の心に目を向けるゆとりを与えるきっかけになっている。
(2) 知子に父の思いやりを感じさせることで、白い雪と荒い海の連続する風景にうんざりしていた気持ちを、元気づけて和ませ、父への申し訳なさを抱かせるはたらきをしている。
(3) どこまでも続く荒涼とした風景をぼんやり眺めていた知子に、長万部駅に着いたことを印象づけ、旅の緊張を和らげ、落ち着いて父と向かい合うきっかけになっている。
(4) 他の受験生たちは一人なのに、室蘭からずっと父と一緒にいることがたえきれなくなっていた知子に、父との会話の糸口を与え、和やかな雰囲気をかもし出すはたらきをしている。

⑥ 「机の抽斗を……抽斗をとじる」とあるが、この行為からうかがえる筆者の心情はどのようなものか。わかりやすく説明しなさい。